

3 . シマの身体から沖縄の身体へ

ヤマトゥへの普及過程

岡本 純也

はじめに

これまで筆者は、戦後になって盛んに踊られるようになった沖縄の民俗舞踊「エイサー」を取り上げ、グローバル化の進行する中でローカルな文化が、その従来のあり方を変容させ、活性化していくことについて論じてきた¹。エイサーに関してみれば、戦後に「エイサーコンクール」という、不特定多数の観客に「みせる」踊りの場が生じたことが、その後の沖縄の内部での再活性化を決定づけたと考えられる。旧盆に祖霊供養を行うためにシマ（地域共同体）で踊るという、従来の文脈を離れ、沖縄各地から集まって来たエイサーを比較し、競演させるという新たな都市型のイベントに、エイサーの踊り手である青年も観客も熱狂したのである。1980年代までに沖縄では、戦前に踊られていたエイサーが復活したり、従来、旧盆の行事としてエイサーを踊っていなかった地域でエイサーが踊られるようになったりし、沖縄の青年文化としてのエイサーは確立していった。

一方、沖縄以外の地域へのエイサーの広がりについては、1970年代には東京と関西で、沖縄からの移住者によって踊られるようになったが、1980年代には踊られる地域が増えたり、踊り手が多くなったりという現象はみられなかった²。ところが、1990年代に入ると、徐々にエイサーを踊る団体が増え、現在では「エイサーブーム」とも言えるほどに、各地に舞踊としてのエイサーを愛好する団体が増殖している。もちろん、沖縄以外の地域には、旧盆という文脈でエイサーを踊るという慣習はない。したがって、これらのエイサーを踊る団体は、都市で催される「祭り」や「フェスティバル」といった祝祭イベントが主な活動の場となり、最近では、百貨店などで開催される「沖縄物産展」などに出演し、「沖縄らしさ」を演出する格好の呼

び物になったりもしているのである。明らかに、エイサーは沖縄以外の地域に浸透し、各地で根付き始めている。従来の文脈とは異なる都市的な祝祭イベントの中で、また、沖縄の特産物を売る物産展の中で、「沖縄らしさ」を表象する文化装置として、都市文化の一部として位置づけられてきたと考えられるのである。その前提には、エイサーを踊る踊り手を見て、それが「沖縄の民俗舞踊」と理解できずとも、そこから「沖縄らしさ」を感じとる観客の「まなざし」がなければならない。それは、サイドの言う「心象地理³」ととらえてもいいし、多田の言う「沖縄イメージ⁴」ととらえてもいいだろう。「沖縄なるもの」を想起した時に描かれるものの中に「エイサー」が組み込まれてきたということである。

では、どのような過程でエイサーは沖縄以外の地域（一般的に沖縄では「ヤマトゥ」と呼ぶ）へと浸透し、「沖縄なるもの」を構成する要素として受容されていったのだろうか。ここでは、長期間にわたり、広範囲のエイサーの動向を把握するために全国紙の新聞記事データベース⁵の内容分析⁶を行った。

新聞記事から得られる情報は主にエイサーがどのような場で踊られたのか、エイサーを踊ったのはどのような団体であるのかといったものであるが、記事数の増減は単純に踊りの場や踊る団体の増減を表すとは考えられない。実際に踊られた事実があっても、それが新聞記事として取り上げられないこともあるからである。したがって、ここでは記事数の増減は、社会の注目の度合いやエイサーをどのようなものであるか認識する人々の増減ととらえたい。

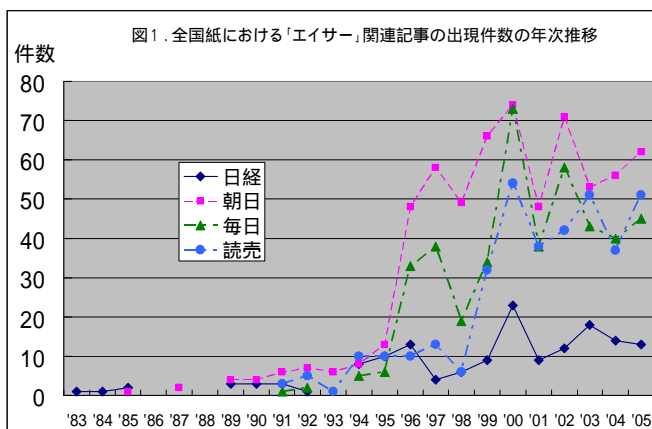
また、記事の記述、描かれ方を分析することによって、読み手がエイサーをどのようなものとして受容していったかが読み取れると考える。さら

には、沖縄の文化であるエイサーがどのような位置づけがなされることによって都市の文化の一部として根付きはじめていくかが明らかになるであろう。

・ 広がりをもせるエイサー

筆者がエイサーの調査を始めた 1990 年代初頭には、「エイサー」という名をあげて「沖縄の民俗舞踊」のことでありと認識をする者は、周囲にはほとんどみられなかった。当時、横浜の大学院生であった筆者が、日常、新聞やテレビなどのマスメディアを通して、エイサーに関する記事や番組を目にすることはほとんどなかった。同時期に沖縄の地方紙（『沖縄タイムス』『琉球新報』）やローカルテレビ（OTV、RBC）では、数多くの記事や番組を目にすることができた。それだけエイサーに関する情報にはギャップがあり、エイサーの認知度は低かった。ところが最近では状況が変わり、マスメディアを通してエイサーに関する情報に触れる機会が、東京で暮らしていても増えている。

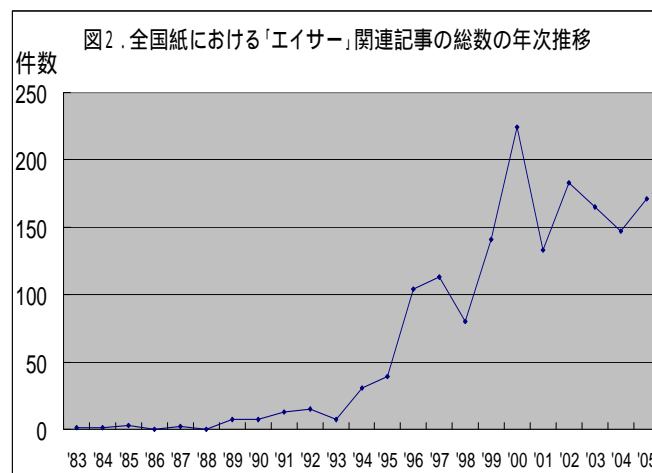
図 1 は、朝日新聞社、読売新聞社、毎日新聞社、日本経済新聞社のそれぞれが提供する、全文記事検索に「沖縄 and エイサー」（見出し、記事本文に「沖縄」と「エイサー」という言葉を同時に含む）で検索をかけ、その件数の年次推移を表したものである。



まず図 1 を見て分かるのは、'95 年以降、エイサーに関する記事数が圧倒的な伸びを見せてい

るということである。それまで年間数件であった記事が、数十件に増え、読売、毎日に関してみれば、'99 年以降、30 件を超える記事を毎年掲載している。

さらに、詳細にみると朝日、読売、毎日、日経の記事数は、数量は異なるが連動した推移を見せていることが分かる。その動きをもっと分かりやすくするために、4 社のデータベースの記事総数を時系列的に示したものが図 2 である。



この図より読み取れるのは、エイサーに関する記事は、数十件の増減を繰り返しながらもその件数をのばしていつているということである。そこにはいくつかのピーク（前年よりも件数が多く、次の年には件数が下がっている）が読み取れる。'92 年、'97 年、'00 年、'02 年などが、ピークの年として特徴的である。では、どうしてこれらの年にエイサーに関する記事が多くなっているのか、より詳細に見ていきたい。

'92 年、'97 年、'00 年、'02 年は、沖縄にとって、特別な年であった。'92 年、'97 年、'02 年は、それぞれ、'72 年の「沖縄本土復帰」から数えて 20 年、25 年、30 年の年であり、'00 年は、「九州・沖縄サミット（主要国首脳会議）」が開催された年であった。

「本土復帰」から節目となる年には、その記念イベントが日本各地で催され、そこでエイサーが踊られたとの記述が頻出する。たとえば、'92 年 5 月 18 日の『朝日新聞』大阪版朝刊は、「沖縄の誇り、エイサーで 大阪・大正区で復帰 20 年

の集い」と題して次のような催しがあったことを報じている。

「大正区の大正会館で 17 日、沖縄の伝統を伝える『まーんかい行ちゅがウチナー（どこへ行くのか、沖縄）』と題した集いが開かれた。子どもたちが沖縄の盆踊りエイサーと祖父母らの苦労話を織り込んだ創作劇を熱演した。小太鼓の音が響き渡り、会場を埋めた親ら約 500 人から拍手がわいた。

集いは、歌や踊りを通して、本土復帰から 20 年を迎えた沖縄の現状と未来を考えようと、初めて企画された。創作劇には沖縄の踊りなど文化や歴史を学んでいる『大正沖縄子ども会』の約 20 人が出演した。……」

大阪市の大正区は沖縄からの移住者が多く住んでおり、復帰からの節目の年に取り上げられることの多い地域である。上記の記事はその中の一つである。

また、'97 年の 25 周年の 2 月 24 日『朝日新聞』北海道版朝刊には、以下のようなイベントが開催されたとある。

「琉球の調べと踊り、北の人々魅了 札幌のグループが公演 / 北海道

今年五月の本土復帰二十五周年を前に、沖縄に伝わる琉球民謡と琉球舞踊を市民に広く知ってもらおうと、札幌の市民グループ『札幌琉球民謡愛好会』（小林正樹会長）が二十三日、札幌市中央区の小劇場、ルネッサンス・マリアテアトロで『オキナワンナイト』を開いた。

勇壮な太鼓と三線（さんしん）のリズムに合わせて沖縄の旧盆に村をにぎやかに踊り、練り歩く『エイサー』も披露。会場を埋めた約三百人の聴衆を魅了した。……」

これらのイベントに関する記事に加え、沖縄の現在（もしくは沖縄から本土へ移住した人々の現在）について特集する記事の中にエイサーが含まれているというものも、多く認められる。

このような復帰記念イベントや復帰記念特集記事にみられるエイサーの描写は、同様に、'00 年に開催された「九州・沖縄サミット」に関する記事にも認められる。

'00 年 6 月 27 日の『朝日新聞』西部版朝刊には、以下のような記事が掲載された。

「『琉球文化を世界へ』 沖縄・首里城公園で『宴』始まる

九州・沖縄サミット（主要国首脳会議）を前に、沖縄の伝統芸能を披露する『琉球芸能の宴（うたげ）』が二十七日から、那覇市の首里城公園の特設ステージで始まった。古典芸能や県内各地の民俗芸能、民謡、集団で太鼓を打ちながら踊るエイサーなどが上演される。七月二日まで。琉球王朝時代から受け継がれた伝統文化を世界に発信しようと、国営沖縄記念公園事務所などが主催している。……」

上記記事は沖縄が自らの文化を世界に発信するために開催したイベントについて書かれているが、同年 7 月 14 日の記事には沖縄以外の地域でのイベントの開催について記述されている。

「名古屋発世界へ、エイサー踊ろう サミット最終日に披露

沖縄県名護市で開かれる九州・沖縄サミット（主要国首脳会議）にあわせ、沖縄の踊り『エイサー』を一斉に踊って世界平和を祈念しようという催しだが、サミット最終日の二十三日正午から、名古屋市で開かれる。愛知県に住む沖縄出身者ら愛好家で作る愛知琉球エイサー太鼓連などが繁華街を練り歩く。

エイサーは、沖縄県で旧暦の盆に太鼓を打ち鳴らして行う踊り。催しには愛知琉球エイサー太鼓連など、県内五つのエイサー団体が参加する。……」

以上のように、エイサーは、「本土復帰」から節目となる年と「九州・沖縄サミット」といった、沖縄に注目が集まる年に各地のイベントで踊られ

たことが報じられ、徐々に沖縄を表象する踊りとして沖縄以外の地域に浸透していったと考えられる。

・ 平和のシンボルとしてのエイサーと非政治化するエイサーイベント

先に見た記事にある「九州・沖縄サミット」と同時期に開催された名古屋でのイベントは、政治的な主張のある集会である。引用部に連なる記述には、沖縄出身でイベント実行委員長を務める青年の「ふるさとで起こった米軍兵の婦女暴行事件やひき逃げ事件が続いて心が痛みます。サミットを機会に開くこの催しを通して、基地の問題を含めて沖縄の文化に触れてもらい、世界の平和を祈りたい」という言葉がある。この言葉にあるような、米軍基地問題、すなわち沖縄に国内の75%もの米軍施設を負担させていることによって生じる人権侵害や生活が脅かされる問題に対する政治的メッセージをもった集会において、エイサーは踊られることが多かった。特に、'95年9月に起きた米軍兵による少女暴行事件⁷をきっかけとして各地で催された、沖縄からの米軍撤去を訴える集会の数々で、エイサーは踊られている。

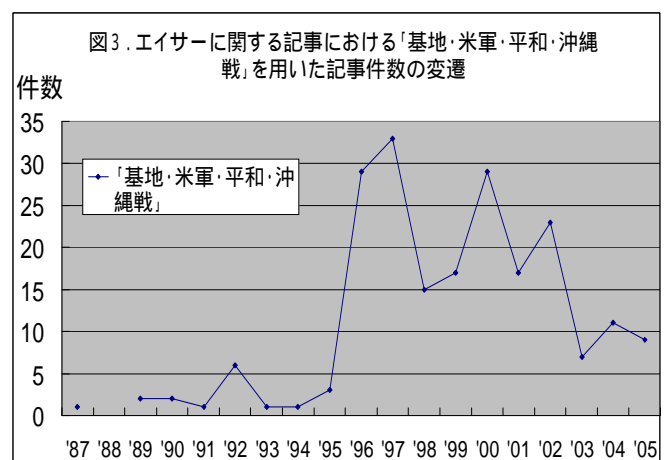
たとえば、'95年11月26日東京での米軍基地撤去を求める集会、'96年1月14日名古屋での暴行事件抗議集会、'96年2月16日東京での米軍基地などをテーマにした創作劇、'96年3月20日大阪での「基地のない平和な島を」求める集会、'96年6月22日広島での平和集会、'96年9月8日京都での基地撤廃を求める模擬投票、'97年4月18日大阪での特措法反対集会、'97年11月6日香川での沖縄をテーマにした講演会などでエイサーは踊られている。

しかしながら、平和へのメッセージの発信と民俗舞踊にはいったいどのような関係があるというのだろうか。たしかに、大きな太鼓を叩きながらダイナミックに踊るエイサーは、人びとの目を引きつけるには格好のパフォーマンスとなるのは事

実である。だが、単に人びとの目を引きつける鳴り物が欲しいならば、他にもさまざまな手段が考えられても良い。特に沖縄の伝統的な文化という点にこだわったとしても、綱引きに用いられるホラ貝やハーリー（爬龍船競争）に用いられる鉦であっても良いはずである。これらの集会や講演会でエイサーが踊られたのは、この民俗舞踊が、沖縄の社会や文化を表象するものとして主催者や参加者にとらえられていたからだと考えられる。

図3は、朝日新聞のデータベースにおいて「エイサー」に関する記事のうち、「基地」「米軍」「平和」「沖縄戦」という語を用いた記事件数の年次推移を示したグラフである。

このグラフからは、上記にみたような、沖縄の基地問題の実情を訴える集会に関する記事や沖縄の基地の実情について論じた記事が'95年を境として急増し、しかし、'97年（復帰25年）、'00年（「九州・沖縄サミット」）、'02年（復帰30年）、'04年（沖縄国際大学キャンパス米軍ヘリ墜落事件の起きた年）に特徴的な増加は認められるものの徐々に減少していているということがみてとれる。すなわち、エイサーは、全国紙に多く取り上げられ始めた'95年以降、それは「基地の島」としての沖縄を表象する民俗舞踊として記述され、ここ数年はそのような記述が減少してきていると考えられるのである。

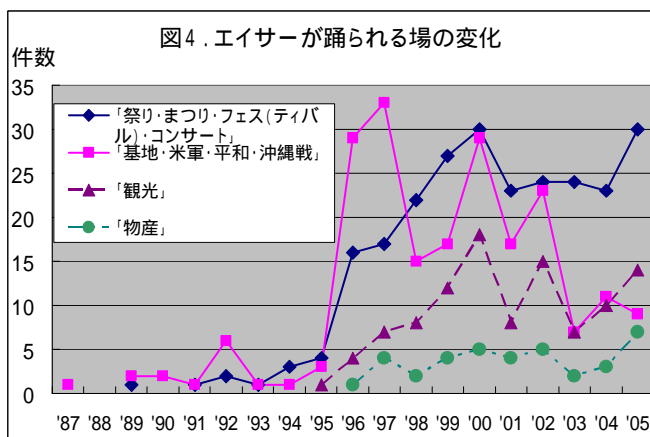


だからといって、エイサーが踊られる場が減少したり、エイサーに関して記述する記事が減少したりしているというわけではない。

図4は、同じく朝日新聞のデータベースにおけるエイサー関連の記事の中で、「祭り」「まつり」「フェス(フェスタ、フェスティバル)」「コンサート」という言葉が用いられているものと、「観光」という言葉が用いられているもの、「物産(展)」という言葉が用いられているものを、図3の結果に重ねて示したものである。

まず、「祭り」「まつり」「フェス(フェスタ、フェスティバル)」「コンサート」といった言葉が使用されるエイサー関連の記事は、'00年のサミットの年の30件に向けてかなりの急傾斜で増加し、'01年から'04年にかけては若干少なくなるものの、'05年には再度30件となっている。すなわち、「～祭り」や「～フェスタ」「～フェスティバル」「～コンサート」といった場でエイサーが踊られる機会は増加し、依然としてその傾向は続いているということである。

これらの祝祭行事は沖縄がテーマとなっていることが多く、エイサーは沖縄文化を表象するものとして、それらを演出するものとみなされていると考えられる。しかも、ここで重要なのは、これらの場が増加する傾向にある一方で、先に見た「基地」「米軍」「平和」「沖縄戦」に関する記事が減少しているということであろう。これらの記事の減少が、すぐに平和集会や講演会といった場が減少しているということに結び付けられるとは限らないが、少なくとも'05年以降の数年間のようにエイサーが新聞で扱われなくなっているということがいえよう。



さらには、「観光」や「物産(展)」という言葉も、エイサー関連の記事に頻出する傾向にある。

これらの結果をまとめると、エイサーは全国紙に頻出するようになった'95年以降、沖縄の米軍問題との関連で記述されることが多かったが、'00年のサミット以降、そのような記述は減少し、それらのテーマが前面に出ない「祭り」「フェスタ」「フェスティバル」「コンサート」に関連して記述されるようになってきているといえる。また、「観光」や「物産展」など、沖縄文化・産物が商品として売られる場との関連性も強まっているととらえられる。このことより、エイサーが踊られる場の質が変容していっていると考えられるのである。すなわち、「政治的主張」が後方に退き「文化性」「消費性」が強調されるようになってきたと。

・消費される「沖縄」とエイサー

沖縄出身の芥川賞作家である目取真俊は、九州・沖縄サミット以降の沖縄ブームを批判的にとらえ、以下のような主張をしている⁸。

「サミット以前から『沖縄病』という言葉が生まれていて、沖縄に移り住んで、『シマナイチャー(島に住む内地人)』を自称する人達はいました。それがさらに高じて、日本の中の異文化発見という形で『沖縄ブーム』がつづいている。沖縄の生活習慣など『本土』との差異を面白おかしく描いて本にするのも流行っている。

基地や戦争だけが沖縄じゃないよ、沖縄をもっと楽しもうよ、という軽いノリで、沖縄の商品化と消費がどんどん進んでいるんですね。

そういう状況を目にして、日本人に対する強い反発を抱く沖縄の若い人達もいる。『本土』から来た連中は沖縄の美味しい所だけをつまみ食いし、消費しているだけじゃないか。沖縄の文化を篡奪していると言ってですね。基地を沖縄に押しつけているという現実は見ようもしないその虫のよさ、日本と沖縄の間にある権力構造を自覚さえし

ていないその傲慢さに苛立っている。」

彼は沖縄の文化がもてはやされる状況を、高度に政治的な判断がなされたものであると指摘する。すなわち「単一民族や単一文化であるよりも、民族や文化の多様性を強調した方が、今の世界には評価されると日本政府は判断したのではないか。政治的に無害である限りでは、沖縄の異文化的要素を出した方が、国民受けもするし、沖縄の人たちを慰撫する効果もある⁹」というのである。そして、「それ(サミット)以降、基地問題や沖縄戦など重い現実を回避して、文化や芸能、風俗習慣、料理を楽しむ風潮がさらに進行しています¹⁰」と主張する。

目取真によるこのような沖縄ブームの分析は、先に見た図4に表れているエイサーが踊られる場の変質を言い当てているといえよう。'95年から5年間は平和集会や沖縄の基地問題に関する催しの中でエイサーは踊られているが、'00年のサミット以降にはそれらの記述が減り、それらが前面にでない「祭り」や「フェスティバル」でエイサーが踊られるようになってみるとみることができる。さらに、「観光」や「物産(展)」など、文化を商品として売り、消費させることを示す言葉が頻出するようになってきている。目取真の「重い現実を回避して」「文化や芸能」を純粹に楽しもうという風潮があるという指摘に適合するのである。

そして目取真は、エイサーに関して、まさにその中心的文化であろうという発言もしている。

「同じような例として『本土』の県人会の問題も言われます。沖縄県人会にヤマトンチューが入ってきて、方言の勉強をしたり、三線を習ったり、エイサーをやる。そのうち彼らが中心となって県人会を仕切り、いつの間にか沖縄の人達が近寄りたくなってしまふ。……」

最近の県人会では、ヤマトンチューが主導権を握る中で、基地問題とか政治的なことはみんなに対立を引き起こすから、これはもうやめにしましょう、あくまでもエイサーだけにしましょう、

という意見が出されて、日本が沖縄に対してふるっている政治的暴力が隠蔽される状況が生まれている、という話を聞いています。¹¹」

このような、エイサーを踊る集団が「基地問題」や「政治的なこと」を厭うという傾向にあるとするならば、図4に表れているエイサーが踊られる場の変質は、まさにそれを反映しているといえよう。

まとめ

これまで見てきたように、エイサーは、旧盆にシマで青年会によって踊られるという従来の文脈を離れ、沖縄以外の地域のさまざまなイベントで踊られるようになってきている。'95年以降、エイサーは、日本各地で行われた「平和集会」や沖縄の基地問題を訴える集会で踊られ、それらを扱う新聞記事が増加した。このようなイベントの場でのエイサーのパフォーマンスやそれを報じる新聞記事の増加によって、エイサーの認知度は高まり、新たな踊り手を創出していったと考えられる。また、踊りの場は、「反戦」「反基地」「平和」を訴える集会から「祭り」「フェスティバル」という政治的主張が前面に出ない都市型イベントへと変化してきているが、依然としてエイサーの踊り手は増加していつているようである。

それらを象徴するのが、東京都の町田市における「エイサー祭り」の創出と、このイベントを中心に活動するエイサー団体の設立にみてとることができる。'03年9月1日の『朝日新聞』はこの祭りやエイサー団体について以下のように報じている。

「音楽、食、文化に「長寿のオバア」。まだまだ続きそうな沖縄ブーム。夏といえばやっぱりこれでしょう。

『イ～ヤ～サ～サ～』『ハ～イ～ヤ～』。大小の太鼓のビートに三線(さんしん)の音色、男衆の力強い足音と軽妙な指笛に、手踊りで続く女性

陣の甲高いフェーシ（かけ声）が重なる。東京・町田のエイサー隊『町田琉（りゅう）』。13、14日の町田エイサー祭りを前に、週1回の練習に熱がこもる。

エイサーは沖縄各地で旧盆のころ行われる盆踊りの総称。念仏踊りが起源で、500年以上の歴史があるとされる。でもなぜ町田で？

『本場の迫力に圧倒されて』と会長の渡辺巖太郎さん（30）。友好都市の沖縄市から町田のイベントに参加したエイサー隊の踊りを見て、仲間内から自然に『やろう！』と声が上がった。99年に『町田エイサー』が誕生。現在は若手主体の町田琉と年齢層の広い『青海波（せいかいは）』に分かれ、祭りやイベントに引っ張りだこだ。

町田琉は勇壮で躍動感のある胡屋（ごや）青年会の踊りを受け継ぎ、『ヤマト』ではトップクラスの実力派。大太鼓は人前に出られるまで最短でも9カ月かかる。18～30代半ばの会員120人の大半が初心者。太鼓を抱えて踊り、全体で振りを含むには相当な練習が必要だが、その一体感が『たまらない』と口をそろえる。

エイサーは数年来の沖縄ブームで本土に広まり、北海道から九州まで100近い団体が活動中という。6月には沖縄で初の『全国エイサーフェスティバル』も開かれた。

町田エイサー祭りも今年で4回目。沖縄で一番人気の園田（そんだ）青年会をはじめ、首都圏や名古屋のエイサー自慢たちが参加する予定で、2日間で『市の人口（約40万人）を超える集客』が目標だ。」

この記事によれば、町田では数十万人を超える人々を「エイサー祭り」が呼び、120人を超える踊り手が年間を通じて活動をしているようである。エイサーは、年に1度の一大イベントとして町田に根付いているといえよう。ここでの「沖縄」「エイサー」の位置づけは、人を呼び込むための祭りのテーマである。振り返れば、エイサーが全国紙に多く登場するようになってからの10年は、「沖縄」というテーマがもつ人々を惹きつける力に、

都市が気づきはじめてきた時期であったともいえよう。

町田だけでなく、新宿でも'01年から「新宿エイサー祭り」が毎年7月に開催されるようになり、数十万人の人々を集めるイベントになっている¹²。このイベントでも、町田と同様に、地元の商店街が中心になってエイサー団体が結成されて活動をするようになってきている。

さらには、杉並区の「杉並和泉明店街」では、'05年3月から、沖縄をテーマに設定し、沖縄からの店舗の誘致やエイサーを呼び物として商店街の再生を図ろうとしている。それを紹介する新聞記事ではこのテーマの選定理由を「沖縄のイメージは青い海・空、長寿に癒やし。古来の交易で様々な文化が融合した地で、異国情緒とともに郷愁を抱かせる。商店街再生に最適」と報じている¹³。

町田、新宿、杉並の例のように、都市は沖縄のもつイメージや文化が人々を惹きつけるということに気づき、さらに、それらを自らの文化に取り込めるということをも発見してきたのである。そして、エイサーは、まさに沖縄のイメージ・文化を表象するものとして都市に位置づけられてきていると考えられる。エイサーに関する全国紙の記事が増大し、おそらくはエイサーに関するイベントや踊り手が増えている背景には、都市による「沖縄」の発見があるのではないだろうか。しかしながら、それらのイベントで描かれる「沖縄」からは、目取真が指摘するように、基地問題などのネガティブなイメージは、巧みに排除されているのである。

¹ 岡本純也「シマの身体から沖縄の身体へ エイサーを踊る身体史の歴史」『一橋大学スポーツ研究』vol.24, 2005年, 21～28頁

岡本純也「シマの身体から『沖縄』の身体へ 民俗舞踊のグローバル化」,高津勝・尾崎正隆編『越境するスポーツ グローバリゼーションとローカルティ』,創文企画,2006年

2 関東のエイサーの普及に関しては小林香代「首都圏のエイサー」、沖縄全島エイサーまつり実行委員会編『エイサー360度』、那覇出版社、1998年、272～275頁を、関西のエイサーの普及に関しては成定洋子「関西のエイサー」、同上書、275～280頁を参照のこと。

3 サイドは「他なる場所の人、景観、文化、自然の表象」として「心象地理 imaginative geographies」を定義する。心象地理は、人々が自己の生活する場所とは異なる場所を、分節化し、一定のイメージを与えることによって描かれる。エドワード・サイド、今沢紀子訳『オリエンタリズム』平凡社、1986年

4 多田は「沖縄」を想起した時に描かれる「青い海」「青い空」「白い砂浜」「基地の島」といったイメージを歴史的な産物として、その生成過程について分析している。ここで「イメージ」は、「現実」が先あって作り出されるものではなく、互いに複雑に絡まり合って現実を構築するものとして論じられている。

多田治『沖縄イメージの誕生 青い海のカルチュラル・スタディーズ』東洋経済、2004年

5 今回の分析に用いたのは、朝日新聞社「聞蔵」（1984年からの記事が検索可能）読売新聞社「ヨミダス文書館」（1986年9月からの記事検索が可能）毎日新聞社「毎日 News パック」（1987年からの記事検索が可能）日本経済新聞社「日経テレコン」（1975年4月からの記事が検索可能）の4つのデータベースである。一部、雑誌記事がデータベースに含まれるものもあるが（『週刊朝日』『アエラ』）、検索結果にはほとんど含まれなかったために、今回は新聞記事と同等に扱う。

6 ここで採用される手法は「内容分析 content analysis」という。松井は書籍・新聞記事・雑誌記事のデータベース（利用可能なデータ available data）の内容分析を用いて、「癒し」ブームを「企業の模倣的同型化が認知的な変化をもたらした制度化プロセスである」ということを明らかにしている。松井のまとめによれば、利用可能なデータの強みは 調査されていることを意識した調査対象者が回答を変えてしまう「反応性」を回避できるという点、 大規模な現象の構造を把握することが容易であるという点、 長期に渡る現象を体系的に把握することが可能であるという点にある。ここでは、長期に渡るエイサーの動向を把握するために、また、特に沖縄以外の地域のエイサーの普及について分析するために、全国紙のデータベースの内容分析を採用した。

松井剛「制度的同型化プロセスとしてのブーム：『癒し』ブームの内容分析」『商品研究』第53巻

3・4号、1～13頁

7 '95年9月に起きたアメリカ海兵隊による少女暴行事件は、その後の、日米地位協定の見直しや米軍基地縮小の運動の契機となった事件である。

8 目取真俊『沖縄「戦後」ゼロ年』NHK出版、2005年

9 同上書、169頁

10 同上

11 同上書、172頁

12 『朝日新聞』2005年7月31日（朝刊）

13 『朝日新聞』2005年6月4日（夕刊）